

## S. R. ランガナタンのコミュニケーション論について

吉植 庄栄（東北大学附属図書館）

1. はじめに
2. S. R. ランガナタン『分類とコミュニケーション (Classification and Communication)』について
3. 本書の内容について
4. 本書に見られるランガナタンのコミュニケーション論について
5. インド的な捉え方
6. 所見
7. おわりに

### 1. はじめに

「教育は常にコミュニケーションを通して営まれてきた。ならば、教育を問い直すことは、すなわちコミュニケーションを問い直すことにほかならない<sup>1</sup>。」とあるように、教育を考える際に、コミュニケーションを視点にすることは有効である。なぜなら、教育は、人（教育する者）から人（教育を受ける者）への情報の教授を基本とするものであるからである。コミュニケーションを介さない教育というものは、想定しづらいと考えている。

インドの図書館学者として著名である S.R. ランガナタン (Shiyali Ramamrita Ranganathan, 1892-1972) は、このコミュニケーションについての論考を、著作『分類とコミュニケーション (Classification and Communication)』<sup>2</sup>という図書に残している。ランガナタンの教育思想を継続的にまとめるに当たり、本稿では本書のコミュニケーション論について考察する。

アプローチとしては、本書に描かれるコミュニケーション論を要約した上で、その特質とインド的な捉え方について考察し、教育の観点で整理する。また付随して、本書の大きなテーマの一つである分類についても、コミュニケーション論理解の必要の範囲に限って扱うこととする。

---

<sup>1</sup> 杉尾宏編著『教育コミュニケーション論：「関わり」から教育を問い直す』北大路書房, 2011.7, p.i.

<sup>2</sup> S.R.Ranganathan, *Classification and Communication*, Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 1951, 291 p.

## 2. S.R.ランガナタン『分類とコミュニケーション (Classification and Communication)』について

### 2.1. S.R.ランガナタン (Shiyali Ramamlita Ranganathan,1892-1972)

インド・マドラス州 (現タミルナドゥ州) 出身の数学者・図書館学者。1931年に『図書館の五法則 (The Five Laws of Library Science)』を発表するほか、コロソ分類法 (Colon Classification) 等独特の考案をしたことで、世界的にも著名である。本稿では主に、このコロソ分類に代表されるランガナタンの分類思想を取り扱う。

### 2.2. 『分類とコミュニケーション (Classification and Communication)』について

本書は、1951年に刊行された。1945年から1947年までランガナタンはインドの首都デリーにあるデリー大学の図書館学専攻の教授を務め、講座の発展に尽力した。本書は、ランガナタンがデリー大学を離れ、外遊を行っている時期 (1948-1953) に『デリー大学図書館学シリーズ (Delhi University publications, Library science series)』の3巻目として刊行された。改版は発表されなかった。この著作への言及がある日本の先行研究<sup>3</sup>もある。

### 2.3. ランガナタンの諸著作の中での位置づけ

当作品は、ランガナタンの著作の中でも「資料整理 (分類・目録)」に関するものの一つである。関連する著作には、『コロソ分類法 (Colon Classification)』、『図書館分類学序説 (Prolegomena to Library Classification)』、『図書館目録 (Library Catalogue)』、『図書館分類の哲学 (Philosophy of Library Classification)』、『分類目録規則 (Classified Catalogue Code)』等がある。

日本での先行研究は、主に図書館情報学分野で以下の通り10本以上ある。ランガナタン在世中にもしばしば発表され、現在まで継続して研究される題材である。一方内容的にはコロソ分類の構造研究の業績が占め、管見によれば思想研究の論文はこれまでに発表されていない。

・藤川正信「コロソ分類法について」『薬学図書館』4(1), 1959, pp.384-386.

---

<sup>3</sup> 緑川信之「ランガナタンにおけるファセット概念の展開」『Library and Information Science』69, 2013, pp.62-64.

- ・板寺一太郎「コロソ分類法の特徴とその批判」『図書館界』14(2), 1962, pp.33-46.
- ・板寺一太郎「コロソ分類法の特徴とその批判-続-」『図書館界』16(4), 1965, pp.110-119.
- ・築山信昭「ランガナタソのコロソ分類法について」『図書館学』21, 1972, pp.25-32,24.
- ・真下勇「ファセツ分類法を理解するために--コロソ分類法におけるファセツ分析法と主題概念について」『図書館雑誌』84(10), 1990, pp.696-698.
- ・緑川信之「分類法におけるファセツ概念の検討」『図書館学会年報』43(3), 1997, pp.117-128.
- ・緑川信之「ランガナーターソにおけるファセツ概念の展開」『Library and Information Science』69, 2013, pp.47-81.
- ・緑川信之「ファセツ概念の源流」『日本図書館情報学会誌』59(1), 2013, pp.17-31.
- ・緑川信之「構造-表示方法説から見たランガナーターソとヴィッカリーのファセツ概念」『Library and information science』71, 2014, pp.1-25.
- ・緑川信之「ランガナーターソによるファセツ概念導入の意義」『TP&D フォーラムシリーズ：整理技術・情報管理等研究論集』24, 2015, pp.32-49.

### 3. 本書の内容について

#### 3.1. 本書の内容について

本書は、次の3部によって構成されている。

- ・第1部「分類とその進化 (Classification and its Evolution)」
- ・第2部「コミュニケーション (Communication)」
- ・第3部「分類とその未来 (Classification and its Future)」

#### 3.2. 第1部「分類とその進化」

このパートでは、分類の概論として、事物を分類すること自体を考察し、人類の分類に対する感覚が時代とともに進化してきた旨について解説をしている。最終的には列挙型分類 (Enumerative Classification) と分析合成型分類 (Analytico-Synthetic Classification) を比較し、後者の利点を紹介している。

最初の分類に対する感覚は、二分法である。全て何かの基準に基づき、「あるもの」か「そうではない」ものかの二つの集合に分ける。次に、その分類は二つ以上になり、カテゴリーが増えて行く。

分類に対する第二の感覚は、利用の観点である。特定の目的に従い、利用

の観点に従った基準で事物を分類し、序列づけをすることは、人々の置かれた状況に大きく関わっている。人間にとってこの仕分けと順序付けの観点が、事物把握能力や人と人とのコミュニケーション能力に大きく関わるため重要であり、その結果、子どもの教育内容にこの分類の概念や技法を教授することの必要性を説いている。

分類に対する第三の感覚は、図書館の分類法である。これは自然に出てきたものではない人工物で、限られた人のみに関係する特殊なものである。無限の知識宇宙 (the universe of knowledge) を仕分け、数字を使って序列づけるものなので、図書館分類を考えるには、高度な抽象力を必要とする。そして具体例として米国議会分類法 (Library Congress Classification)、十進分類法 (Decimal Classification)、コロン分類法 (Colon Classification)、国際十進分類法 (Universal Decimal Classification) などの手法を挙げた上で、これらを比較吟味する。

次に、知識には分野があり分野ごとに相互関連していること、その相互関連が分類の構造に影響を与えることについて、論究している。この感覚を、空間を把握し図表にいわば「翻訳する」地図作成に例えて表現している。地図作成以外にも、数学における「変換 (Transformation)」、そして国政術や薬、おもちゃ屋などの例えを使って列挙法分類、分析合成法分類の特質を挙げ、分析合成法の優位性を説明する。

また列挙法分類は、誘導灯のような働きをして、その領域に不慣れな人を導く働きをする性格を持つことに対し、分析合成法分類は誘導灯の働きのみならず、探照灯のような面的に光を当てる性質があることを述べる。分析合成法が、参考調査担当図書館員 (Reference Librarians) の助けになる例の紹介や、ドキュメンテーション業務で役立つ点などを紹介している。

第1部の最後には、深層分類 (Depth Classification) についての説明があり、続けてランガナタンの決意表明が語られる。それは図書館が、この深層分類を使うことで図書とそれを読む人との出会いを一層促し、世界的コミュニケーションを促進せねばならない、というものである。

### 3.3. 第2部「コミュニケーション」

ここでは、コミュニケーションについて、人々が思考を交換しあうという側面から論究し、その際の分類の役割と限界を紹介している。

最初に人類の共生社会が、身体面、精神面、霊的な面、という全ての次元で広がり、最終的には一つの世界の成就に至る事を描いている。しかしその一つの世界成就に対しての障害として、言語の問題を挙げる。様々な言語の

乱立が、人類の相互理解の障壁となっているのである。

一方、分類は、経済交流では有効であるが、政治や文学面での交流では役立たないことを解説する。そのほか、霊的コミュニケーションにおいては、分類どころか言語ですら媒介手段の役目を果たすことができない点にも触れている。

次に、文化間の対立の解消について触れている。対立は、主に相手に対する無理解から生じる「恐れ」が原因である。この「恐れ」はコミュニケーションによる相互理解促進によって、解消可能である。その際に分類は限定的であるが、有効性を発揮することができる。そして、知的コミュニケーションによる「知的協働 (Intellectual Team-work)」が促進されることで、最終的には文化対立を超えた一つの世界が成就されるとある。

### 3.4. 第3部「分類とその未来」

このパートの主な内容は、コミュニケーションの型の図式化とコロンの分類法 (Colon Classification) の5つのファセット (Facet) の解説、そして将来性を期待している国際的な学術協力組織についてと、同じく国際的に行われている分類の研究についてである。

最初にコミュニケーションの型を、「発信者→受信者」というシンプルな形から考えはじめ、次に「発信者→言語→受信者」というように、「言語」という媒介物を考える。媒介物は、「言語」から「音声」、「印刷物」、「音源記録」、「電波」、「マイクロフィルム」と展開し、「翻訳」や「暗号」を介するコミュニケーションについても論考する。

続けて分類がコミュニケーションで果たす役割として APUPA パターンを説明する。これは、Alien-Penumbral-Umbral-Penumbral-Alien の頭文字を取ったもので、利用者が探している主題に、資料が的中するかどうかを模式化<sup>4</sup>したものである。目録・分類はこの APUPA パターンに基づき探索者の関心に合った資料を探しやすくする、という効力を発揮する。そして参考調査担当図書館員は、人的なサービスによるナビゲーションで、探索者の関心を満たす。

次にコロンの分類法の事物の見方であるファセットの概念、つまり時間、空間、エネルギー、物質、パーソナリティの5つのファセットについて解説し

---

<sup>4</sup> 関心ない主題 (Alien) →少し関心に関連する主題 (Penumbra) →関心ある主題 (Umbra) と近づいて行き、また主題関心からずれて離れていく。

ている。

最後に世界的な協力組織であるユネスコへの期待を述べ、国際図書館連盟 (IFLA)、国際ドキュメンテーション連盟 (FID) についても言及して終わる。

#### 4. 本書に見られるランガナタンのコミュニケーション論について

本書で描かれるランガナタンのコミュニケーション論について、理想として描いた協働社会と一つの世界の実現という視点で、全体を再構成する。

##### 4.1. 協働社会 (Co-operative Living) と一つの世界 (One World)

ランガナタンは、人々が共に各々の特性を活かし協力しあって社会をなすことを最高のものとしている。

社会における人間は、ジャングルのそれと異なる。社会で人々は協働して生きる。全ての時代と空間を通じて、そしてあらゆるレベルで、人類社会は知識を蓄える。人間は自分一人の情報、知性、靈感の経験を頼るのみでは生きていけないのだ<sup>5</sup>。

人間が霊的な潜在力を具現したとき、親しく共感的に人々と存在に和合するようになる。協働は全空間と全時間を超えて広がる。協働とは全く至上のものである。その他に選択肢はなく、避けることはできない<sup>6</sup>。

ヴェーダの預言者の歌<sup>7</sup>が協働の重要性を謳っていることも紹介される。このヴェーダの賛歌からの引用は他のランガナタンの作品でも多く見られる<sup>8</sup>。

一緒に動き、一緒に話して正しく理解しよう。

一緒によく考え、一緒に達成しよう、

一緒に思いだし、一緒に考えよう。

それぞれの意思をまとめ、気持ちを調和させ、考えを協調させる。

そうすることで、あなた達の中に協働が完成する。

次にその協働社会は、一つの世界に至ると述べる。

次第に小さな協働社会は領域を広げていく。家族から村へ村から部族社会に、

---

<sup>5</sup> Ranganathan, *Classification and Communication*, 1951, p.123.

<sup>6</sup> Ibid. p.125.

<sup>7</sup> Ibid.

<sup>8</sup> *New Education and School Library*(1961), *Education for Leisure*(1963)など。これらの作品で提示される賛歌と比較すると、後半部分に語句の相違が見られる。

そして国家へと。その終点は一つの世界の到来である<sup>9</sup>。

小さな協働社会が家族、村、部族、国家、植民地などの段階を経て、最終的には地球全体が一つの世界になるとしている。

## 4.2. 協働社会と一つの世界の実現の障害

次にランガナタンがこの「協働社会」と「一つの世界」成就に向けての障害を、どのように考えていたか紹介する。コミュニケーション手段について、最初に考えねばならないことが、言語の問題である。世界中には約5千とも言われる多種多様な言語があり、民族間・国家間のコミュニケーションを難しくしている。ランガナタンはこの障害について、商業的交流 (Commercial Contact)、政治的理解 (Political Understanding)、文学の交流 (Literary Exchange)、霊性コミュニケーション (Spiritual Communication)、文化の協調 (Cultural Concord)、知的協働 (Intellectual Team Work) の視点で問題の分析と解決の検討を行っている。

また「恐れ (Fear)」がコミュニケーションの失敗を導くことを指摘している。人の心の中の悪魔が、感情・エゴを操作し、「恐れ」を引き起こす。その「恐れ」は協働を抑制し、コミュニケーションを失敗させ、闘争、攻撃、戦争の原因となるのである<sup>10</sup>。

## 4.3. 協働社会と一つの世界の実現の手段

次に以上の障害克服について、以下の手段を提示している。

### 4.3.1. 理想形にして実現が難しい直接伝達

ランガナタンは、コミュニケーションのあり方は、「思考内容 (Thought Contents)」が発信者から受信者に、媒介するものなく直接伝達される方法が至上であると述べている。

「(前略) 若い導師が (菩提樹の下) に座っている。彼は光を放っている。コミュニケーションは静かに行われている。弟子たちは全員老いている。彼らに光が降り注ぐ。彼らの疑問は解けたようだ。」確かにこのレベルのコミュニケーションでは自然言語 (Natural Language) も分類言語 (Classificatory Language) も頼る事ができない。コミュニケーションは直接にして何かを媒介しない交流

---

<sup>9</sup> Ranganathan, *Classification and Communication*, 1951, p.13.

<sup>10</sup> Ibid. p.124, p.165.

であるべきである<sup>11</sup>。

この直接伝達を図1のように図式化している。

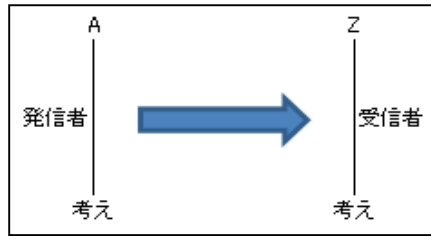


図1. 直接伝達

しかしランガナタンは、この直接伝達は現実的ではないという。

現在の人類進化の状態では、何かを媒介しないで直接思考を伝達する方法は、共通して実践することができないであろう。これができるのは限られた人や物である。H.G.Wellsは『神のような人々 (Men like gods<sup>12</sup>)』でこれを描いている。この直接伝達は、超心理学の主題である<sup>13</sup>。

以上のように直接伝達は、インドの伝統的な宗教観等を背景にイメージはできるが、ごく少数の選ばれた人にもみ実現可能なものである。ゆえに「一つの世界」成就に向けての具体的な手法としては、実際的ではない。そこで次節の通り、ランガナタンは次善策を提示する。

#### 4.3.2. 次善策としての知的コミュニケーション

直接伝達という手段を取ることが困難であるため、一つの協働世界は、全世界的な知識の交換・交流・共有というコミュニケーションによって成就する、というのがランガナタンの次善策である。

民族間の理解が地球全体で可能にならなければならない。コミュニケーションが可能なる時にわかり合うことができるのである。これは一つの言語になることで、簡単に成就する。(中略)(筆者注：しかし言語を統一することは不可能であるので)一つの解決策としては、言語に代わる補助手段を考案することである。(中略)知的研究は、コミュニケーションの点でさらに研究されねばならない。特に分類語が国際的なコミュニケーションを促進する社会について

<sup>11</sup> Ibid. p.182.

<sup>12</sup> H.G.Wells, *Men like Gods*, Cassel, 1923, 304 p.

<sup>13</sup> Ranganathan, *Classification and Communication*, 1951, p.218.



てさらに研究されねばならない<sup>14</sup>。

世界的なコミュニケーションを行うには、言語が一つであることが条件である。しかしこれは不可能であるため、ランガナタンはさらなる次善策として分類を手段として挙げる。人工的に作成された分類が、知識を整理し民族間での共有をすすめる役割を果たす。これにより世界規模での知識交換・共有が可能になる。

また知的コミュニケーションは、闘争・戦争の根源となる「恐れ」という感情にも効果を発揮する、としている。かつて地域等の狭い範囲ではあるが、この知的コミュニケーションは、考えの自由な発現を導き、その交換が相手に対する理解を生むことで「恐れ」を解消し感情的になることを回避させてきたという<sup>15</sup>。

以上を根拠にして、知的コミュニケーションを全世界規模へ広げることによってランガナタンは活路を見出している。つまり様々な文字資料を全世界の人々が読み合い「考えたこと」を共有することで、無理解に起因する「恐れ」を解消するのである。その際、外部記憶装置（Externalised Memory 図書等の文字資料のこと）が媒介物となり、空間も時間も超えたコミュニケーションを実現させるのである。

文字資料は図書等の形態を取ることで、空間的な距離を克服すると共に、保存されることで時間も超えるという性質を持つ。地球の裏側の人々の考えを知る契機になるほか、数百年前に生きた人々の思考の記録から、学ぶことも可能なのである。

この外部記憶装置による知的コミュニケーションは図2のように表される。ここでは外部記憶装置を「印刷文（Printed Words）」とする。

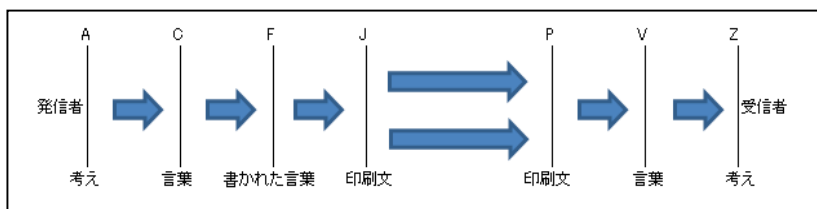


図2. 外部記憶装置（印刷文）によるコミュニケーション

<sup>14</sup> Ibid. p.159.

<sup>15</sup> Ibid. p.165.

発信者は、自分の思考を文章化し印刷して頒布する者である。この書かれた印刷物が著者の手を離れて、世界的に流通する。受信者は、読み手である。読み手は印刷された文を読み、書かれている言葉を理解することで、著者の考えを受け取るのである。

#### 4.3.3. 外部記憶装置が手元に届くために

次にその外部記憶装置が、必要とする受信者に届くための仕組みについてもランガナタンは言及している。それが「分類」である。図2のJからZにかけてのプロセスに、KとTというポイントが新しく加えられて、更に詳しく説明されている（図3）。

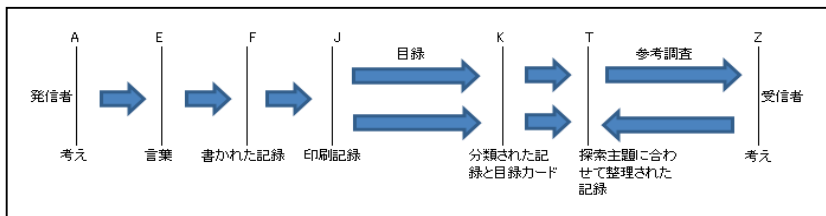


図3. 発信者の情報が目録・分類・参考調査を介して必要とする受信者に伝達

発信者から発信された外部記憶装置は、その情報を必要とする受信者へ届かねば、コミュニケーションは成立しない。そのために媒介物である印刷記録（Printed Record）の目録を取り、整理して分類することで、探索主題ごとに整理し、受信者がその情報を発見しやすくせねばならない。そのためには出来る限り外部記憶装置の本質を効率よく伝える分類が必要である。一方、その外部記憶装置の情報の組織化（目録・分類の作成）を進めるだけでは、受信者の独力、ここでは目録と分類の理解力のみで頼ることになり、未だに不安が残る。この過程を図書館員が介添えを勤めることで、伝送効率を上げる必要がある。

TからZの参考調査（Reference Service）とは、そのサポートを指す。受信者の知的好奇心の要求を図書館の参考調査担当は、目録と分類とを活用し、求めている外部記憶装置を探索、発見、提供することで、満たすようにする。

#### 4.4. コミュニケーションにおける分類の有効性と限界

次善策である分類により、世界的な知的コミュニケーションの実現を主張

するランガナタンであるが、分類の有効性の解説はもちろん、その限界も指摘している。

有効性については、言語が違う民族でも、経済的につながることが可能である、という点を挙げている。古くから言葉が異なる民族間における経済上の取引は実現されていた。その際、品目の分類、取引・契約の方法といった経済用語の統一が進められてきたから可能であったとランガナタンは述べる。これはまさに異民族間のコミュニケーションを分類が担っていた好例の一つである。

一方、分類には媒介が無理なコミュニケーションについて、文学と精神交流（霊性コミュニケーション）を挙げている。文学の交流や霊性コミュニケーションのレベルでは、表層的な言語の伝達能力を超えている交流であるので、分類が役に立たない。これは前者が自然言語で書かれているものの、言外以上のものを伝達するためであり、後者は分類どころか自然言語ですら伝達メディアにならないので、人工言語である分類は出番がないと、ランガナタンは述べている。

## 5. インド的な捉え方

### 5.1. 分析合成型分類

4.3.3.で紹介した過程において理想的であるのは、分類が「本質をあやまらず」受信者へ伝える働きをすることである。この点で、ランガナタンは分析合成型分類の使用を強く主張している。

日本十進分類法（NDC）等、現在主流となっている分類は列挙型分類であり、様々な主題を列挙し、図書を何らかの主題一つに当てはめるものである。例えば、哲学、東洋哲学、西洋哲学といった主題を列挙し、上位下位区分で階層化するものである。

例) 100 哲学<sup>16</sup>

→101 哲学理論、102 哲学史、103 参考図書、104 論文集、評論集、講演集・・・

110 哲学各論

→111 形而上学、存在論、112 自然哲学、宇宙論、113 人生観、世界観・・・

120 東洋思想

→121 日本思想、122 中国思想、中国哲学、123 経書、124 先秦思想、諸子百家・・・

---

<sup>16</sup> この例は、日本十進分類法（NDC）第10版による。

しかしこの列举型分類は、様々な学問分野の主題が混合している学際的な主題を分類する場合に、困難が生じる。列举されている分類の何かに本を当てはめねばならないからである。この困難を解消するため、様々な工夫が施されているものの、しかし事前に準備している枠のいずれかに決定せねばならないため、どこかの分類に無理に当てこむことになってしまう。複合主題のみならず、新しい概念の分類にも困難が伴う。新概念は、事前に枠を準備しておくことが不可能であり、既存の概念の組み合わせ等の工夫で対応する他に方法が無いためである。以上の理由で、この列举型分類は本質を誤伝達する欠点があり、ランガナタンは分析合成型分類の方が増殖し展開していく知識の宇宙を表現することに対して、機能的であるとする。

分析合成型の分類であり、ランガナタンが考案したコロソ分類法<sup>17</sup>は、時間 (Time)、空間 (Space)、エネルギー<sup>18</sup> (Energy)、物質 (Matter)、パーソナリティ<sup>19</sup> (Personality) の 5 つの局面 (ファセット:Facet) で本の主題を分析し分類を付与するものである。この 5 つの視点で見ると、物を一つの見方に押し込めることがない。

例)「シェイクスピアの天文学的知識を取り扱ったその批判書」:O:2J64:90B9<sup>20</sup>

何らかの新しい概念が出現しても、この 5 つのファセットに基づいて分析した結果を合成することで、表現が容易である。この考えはランガナタンによると「既成の分類法には何ら関係はない。これは私の独創だ。強いて言う

<sup>17</sup> 『『コロソ分類法』 Colon Classification (CC. 初版 1933) は主題の構成単位要素 (ファセット facet) をつなぐ分析・合成の手法であった。藤野幸雄, 「図書館分類」, 『日本大百科全書 (ニッポニカ)』, <<http://japanknowledge.com/lib/display/?kw=%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E5%88%86%E9%A1%9E%E6%B3%95&lid=1001000170203>> (参照 2016-11-30) .

<sup>18</sup> 板寺一太郎「コロソ分類法の特徴とその批判」『図書館界』14(1), 1962, p.33. によると「機能」と訳される。

<sup>19</sup> 同上によると「基本的性格」と訳される。

<sup>20</sup> 同上 p.34. O=文学、O.2=戯曲、J64=1564、シェイクスピアの生誕年、:9=批判、o=bias,(phase の間の関係)、B9=天文学

ならばヴェーダの哲学だ<sup>21</sup>。」という言葉を残していることから、インド的な物の見方に通じると考えられる。

## 5.2. 霊性コミュニケーション

### 5.2.1. 本質を伝える

ランガナタンはヒンドゥー思想家、ラーマクリシュナ (Sri Ramakrishna, 1836-1886) の逸話<sup>22</sup>をもとに言葉や分類では語り得ない、全体論的な見方を示している。その逸話とはラーマクリシュナが三昧 (Samadhi) の境地を人に伝えられないので嘆くという話である。ここでの三昧の説明は、絶対と共にある自己の境地に入ること (getting into the state of Identity with the Absolute) とある。言葉で解説する、分別して説明する、といったことを拒み、本質を全体論的にあるがまま伝達しようということを志向する一例である。

インド的なものの見方として、カルトリ=タントラ (Kartr Tantra) とヴァスツ=タントラ (Vastu Tantra) という二つの手法を紹介している<sup>23</sup>。前者は行為依拠 (action-dependant) の見方で、分析的にものを見る見方である。一方、後者は物依拠 (thing-dependant) の見方であり、切り分けず、抽出せず全体を見る見方である。ラーマクリシュナが伝えたかった三昧の境地は、この後者の手法で伝達されねばならない。

これに基づくと、列挙型分類は、見る側の分析に当てはめて見るという意味で、カルトリ=タントラ的で、分析合成型分類は本質に即して見て表現するという意味で、ヴァスツ=タントラ的である、と考えられる。そしてこの寓話は、ランガナタンが推す分析合成型でなければ、本質を伝えることができない、ということを示しているのである。

### 5.2.2. 霊的に一つになる世界

4.1. で示した「協働社会」「一つの世界」は人類が成熟することで実現可能であるとも述べている。ランガナタンの言う人類の成熟とは、人々が感情や民族といったレベルを超え、思考内容 (Thought Content) を共有し、その知性レベルの協働をすることで完成するという。この境地に達すれば、近代に

---

<sup>21</sup> S.R.ランガナタン著；竹内愨解説『図書館の歩む道：ランガナタン博士の五法則に学ぶ』日本図書館協会, 2010.4, p.37.

<sup>22</sup> Ranganathan, *Classification and Communication*, 1951, p.179.

<sup>23</sup> Ibid. p.180. *Reference Service*, 2<sup>nd</sup> ed. (1961), p.174 では前者を comprehender-dependant、後者を entity-dependant と訳している。

おけるインド哲学の泰斗であるオーロヴィンド（Sri.Aurobindo, 1872-1950）が述べた「超精神（Supra-Mental）」に人類が至ることとなり、これまでに認識していた自分を脱ぎ、全体の中の個、個の中の全体を体現した絶対の世界へ至るとある。その時、人々はサッチダアーナンダ（Satchidananda：純粹存在・純粹意識・純粹歓喜）の境地になる、としている<sup>24</sup>。

これは、4.3.1.で示した様に一度直接伝達は現実的ではない、としておきながら、次善策である分類を介した世界的な知的コミュニケーションの成就が、いずれ人間の靈性を一つにするという期待に他ならない。

## 6. 所見

### 6.1. コミュニケーションの類型化の源流

本書の第3部前半で示されるコミュニケーションの図式、つまり本稿での図1～図3は、情報学における情報伝達の構図を模していると考えられる。特に情報伝達の線形モデルの始祖であるシャノンとウィーバーのモデル（1949）が源流になっていることは想像に難くない。以下の図4と図1～図3は様々な点で類似点が多い。

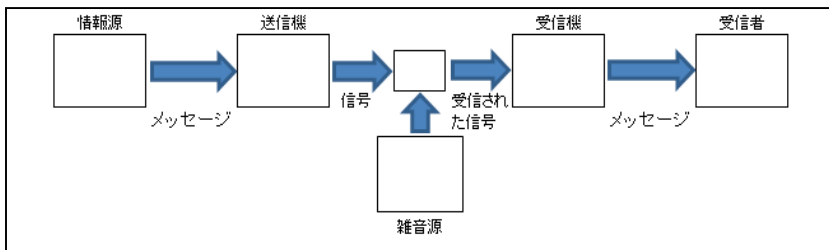


図4. シャノン・ウィーバー（1949）の線形モデル（一般的な通信システム）<sup>25</sup>

この図式は、左の情報源から発信されたメッセージが送信機により電氣的な信号に変換され、それが受信機にて受信され、メッセージが再現され受信者に伝わるといふのを模式化している。信号の伝達過程で、雑音源からノイ

<sup>24</sup> Ibid. p.139.

<sup>25</sup> Claude E. Shannon; Warren Weaver. *The mathematical theory of communication*. University of Illinois Press, 1949, p.5. 邦訳は次から取った。  
クロード・E.シャノン、ワレン・ウィーバー著；植松友彦訳『通信の数学的理論』筑摩書房, 2009.8, p.64.（ちくま学芸文庫, [シ-25-1]）。

ズが発生し、それによって信号が誤伝達される、という現象も示している。

図4と図1～図3を比較すると、左から右に情報が矢印で伝達されていく様子が、同じである。また一度情報の発信源から発信されたものが、何かに変換されて伝送され、それが左に至る際に再現され、情報が伝わるということも同じである。

この図式(1949)は、コミュニケーションの線形モデルとして様々な応用につながった。ランガナタンが本書を刊行した年(1951)は約2年後に当たるため、一つの応用形であるとも考えることも無理が無い。つまり当理論が背景になり、ランガナタンなりのコミュニケーション観が付与されていたものと推察される。この図式を元に考えると、図1の直接伝達や、右部分にて展開される、分類・目録・参考調査によるメッセージの伝達補助が独特なものと考えられる。

## 6.2. 教育への言及

本書での教育への言及は少ないが、分類の概念を子どもに教育し、トレーニングすることを主張している。

人の能力は、分類する力が決めると言っても過言ではない。しかし分類の能力は個々人の才能に依拠しており、才能がある者も居れば無い者も居る。分類の才能が無い子どもに対し、その技法を教えることは、コミュニケーション能力の改善を導き、人的リソースの浪費を改善するという。

この分類の教育は、初等教育でも中等教育でも、そして高等教育でも様々なレベルで行うべきである、とも述べている。またこの実施のために、分類を教育すること自体を研究する必要性も述べている<sup>26</sup>。

## 6.3. 自己教育の観点

本書で直接言及がある教育の観点は、6.2.に示されている分類教育の必要性に限られる。しかし筆者は以前、ランガナタンが教育を「図書を使った自己教育である」と定義していたことを拙稿<sup>27</sup>にて指摘した。それを背景に考えると、次のような教育観にまとめることができる。

本書の主張は、分類によって促進される全世界的な知的コミュニケーション

---

<sup>26</sup> Ranganathan, *Classification and Communication*, 1951, pp.26-28.

<sup>27</sup> 拙稿「S.R.ランガナタン『余暇のための教育(Education for Leisure)』に見られる教育の概念とインド的人間形成思想について」『教育思想』43, 2016, pp.33-55.

ンにより、世界的な知的協働・知識共有が進み、誤解や恐れへの解消による争いの回避が達成される、というものである。この知的コミュニケーションの具体的な中身を考えると、共有した知識を使った自己教育を各々が行い、高いレベルに昇華した結果、一つの世界に繋がっていく、というモデルが背景に考えられていたのではないか。

一步議論を進めると、各々の興味関心に基づく自己教育・探究が促進された結果、学術情報としての発信や共同研究も増加する。そして知的コミュニケーションが一層促進され、霊性コミュニケーションが可能ないわば個を超えた人の絶対数が増える、ということも考えていたと推察する。

#### 6.4. 図書館の役割

最後に図書館についてである。ランガナタンは「協働社会」の拡大による「一つの世界」の成就において図書館が果たす役割を、ランガナタンの信念表明として次の様に述べている。

唯一の正しいこととして、図書館がコミュニケーションを促進させなければならぬ、と感じる。全世界に幸福、喜び、歓喜の光を満たすため、コミュニケーションを促進することが私の信念である<sup>28</sup>。

つまりランガナタンは、図書館が「人類が考えたこと」を共有し交換する拠点となり、世界的な知的コミュニケーション促進の役割を担うことで、「幸福、喜び、歓喜」＝サッチダアーナンダの実現を目指す、という信念を持っていたのではないか。図書館は教育の一形態である、という考えに基づく、図書館や図書による自己教育が世界的な知的コミュニケーションを促進し、サッチダアーナンダに人々を向かわせる、と読み取れる。

#### 7. おわりに

ランガナタンのコミュニケーション論とは、思考内容を直接伝達することができない人類にとって、次善策として、本質をできる限りありのままに伝達する工夫を産み出し、誤解を極力減らすようにせねばならないというものであった。また知的コミュニケーションこそ全世界のコミュニケーションを可能にし、人類の魂の覚醒を促すものとして、重視し期待している。

しかしランガナタンが世界的コミュニケーション成就のツールとして期待

---

<sup>28</sup> Ranganathan, *Classification and Communication*, 1951, p.120.



していたコロソ分類法は、インド本国でも廃れてしまい、現在わずかな図書館が利用しているのみである。請求記号（図書の背表紙に貼付されているラベルに書かれているもの）が長くなり、複雑な分類であるため、職員も利用者も利用し難いのであろう。一方、ファセット構造の思想は、現在のウェブサービスに応用され、図書の情報を多面的に表示するような工夫として現在も継承されている。技術の発展がランガナタンの思想の一部を実現している、とも考えられる。古代からのインド的な物のとらえ方が現代の技術の背景となり、一層人類のコミュニケーションを促進させるという点も興味深い。

最後に、残した課題について述べる。本稿では本書が書かれた時代とランガナタンの「一つの世界」論が産まれた背景について、論究することができなかった。

1945年の第二次世界大戦の終結と国際連合の樹立、各種国際共同機関の設立、そして1947年のインド独立といった、本書が出版される直前の出来事を考えると、本書の主張は、これらの出来事が背景にあってまとめられたものである、と考えている。そしてランガナタンが「一つの世界」成就に対して、非常に希望的にして楽観的な見通しと期待を持っていたのではないかと感じている。

現在、全世界的な知的コミュニケーションは、世界的な学術情報流通網の実現やインターネットの普及により、ランガナタンが描いた理想が達成されつつあるようである。また人類が単一言語になったとまでは言えないが、世界的に英語が普及することで全世界の情報を、英語を介して得ることができ、世界中の人々と電子メールや SNS などのメディアを介して交信することが可能となった。しかしその結果、「一つの世界」や「サッチダアーナンダ」が完成されたとは言い難い。世界各地の紛争や、国々や民族間、宗教間の対立は、多かれ少なかれ未だに発生し、絶えず問題となっている。

ランガナタンの主要著書は、数度にわたる改版を受けているものが多い。しかし本書は、1951年に刊行された後、ランガナタンが没する1972年までに特に手が増えられなかったことを考えると、本書の主張を深化させる方向にならなかったこと、更には言えば本書での情熱が変化していったのではないかと考えている。機会があればこの点について、一層論考を深めたい。